通訳なしで担任が行う現地校との交流授業

── 一方がお客さんになるのではなく，お互いが主になり交流できる授業を目指して ──

前杭州日本人学校　教諭
大阪府箕面市立豊川北小学校　教諭　五十嵐　直　人

キーワード：現地校，交流，国際理解，担任，通訳なし

１．はじめに

経済発展が著しく，日系企業の誘致に熱心な中国杭州。その杭州経済技術開発区（下沙地区）政府が土地，建物を提供して開校した杭州日本人学校。その開校に合わせ，立ち上げから３年間，学校を作り上げるという，貴重な機会を得た。今回はその中で，私が実際に行った「通訳なしで担任が行う現地校との交流授業」について報告したい。

２．交流授業を行うに至った背景

(1) 政府からの紹介と現地校交流

学校が設置された下沙地区は二つの側面を持つ。一つは「外国企業の町」。日本を初め欧米やアジア諸国の企業が数多く存在し，日系企業だけでも100以上を数える。もう一つの側面は「大学，学術の町」である。大学だけでも十数校あり，大学生だけで20万人近くが住んでいる。

こうした側面を持つ下沙地区の政府は「ぜひ外国の学校も進出してほしい」「中国の学校と交流をたくさん持ってほしい」という強い願望があった。杭州日本人学校開校前から，地元でも教育に熱心に取り組んでいる現地校「文海小学」をこの政府から紹介していただいていた。

開校してからは，文海小学の子どもたちに「体育大会で団体演技を披露してもらう」「学習発表会で音楽の演奏をしてもらう」という「ゲスト出演」的な交流は容易に行うことができていた。また体育大会では「徒競走に出場してもらう」だけでなく，「玉入れ，綱引きを一緒に行う」という日本文化にもふれ，参加する交流も行うことができた。

(2)「お客さん」ではない交流を

しかしながらこれらの交流には「中国の子どもたちをお客さんとして招いて関わっている」という現状があった。「お客さんではなく，日本の子どもと中国の子どもが対等に，お互いがともに主となることができる交流ができないか」と職員間でも議論を重ねた。その結果，

・日本の子どもたちだけで，中国の現地校の授業に，通訳なしで参加させてみてはどうか。 ・日本の先生が通訳なしで，中国の子どもたちに授業をする，ということをしてみてはどうか。

という案が浮上した。

杭州日本人学校の子どもたちは，総合学習等の時間を利用して，文海小学の見学には何度か行ったことがあった。しかしあくまで「見学」であって，「参加」はしたことがなかった。また杭州日本人学校の教員も中国語はもとより，英語で授業ができる，というレベルの語学力を持つ者は一人もいないのが現状であった。

ではいったい何ができるのか。お客さんではない，という目的を達成するには

・「こちらから現地校へどんどん入っていく，関わっていく」という場を設定したい。
・言葉の問題があるので，なるべく言葉を使わずに，実技等を入れた授業を行うほうがよいのではないか。
・日本の子どもたちを有効に活用して，授業を行ってはどうか。

と考えた。そこで実際に行うこととしたのが，「体育の交流授業」である。

３．体育の交流授業

(1) 授業の概要

・杭州日本人学校３年生４名，４年生５名，計９名（全員）が文海小学に行く。
・文海小学３年生１クラスにお願いし，一緒に体育の授業を受けてもらう。
・授業指導は私が一人で行う。
・中国の子どもたちにもわかりやすい「なわとび」を授業内容とする。

(2) 子どもたちのめあて

・日本と中国の子どもたちが，日本人教師が行う同じ授業を受け，交流する。（日中）
・日本の子どもたちが中国の子どもたちにやり方を教える等，自分から中国の子どもたちと関わろうとする。（日本）
・なわとびあそびを，見よう見まねでやってみようとする。（中国）

(3) 日本の子どもたちに活躍してもらう

授業では，私の中国語，英語だけで全てを説明，指示できるはずがない。したがって，日本の子どもたちに「実際にやってもらう」ことや，「身振り手振り等をつかって，中国の子どもたちに説明させる」ことを重要視した。

具体的には，本時までの体育の授業で

・交流授業で行う内容を，全て日本の子どもたちに伝えておいた。
・やってほしい見本等を練習させた（なわとびあそびの方法，並んだり，リレーしたりする方法等）。
・日本語でよいので，身振り手振りでどのように教えてあげるか，練習させた。

ということを準備として行った。

(4) 当日の子どもたち

体育館に到着した日本の子どもたちはとても緊張していた。最初の挨拶，準備運動をしているときも，なかなか話しかけたり，関わったりするということができていなかった。

その後４人１組のグループ（日本人１名＋中国人３名）を作った。そこから日本の子どもたちも中国の子どもたちもお互いに話しかけたり，関わったりする動きが出てきた。なわとびリレーをする順番を決めたり，リレーする方法や特別な飛び方を教えたりする場面では，日本の子どもたちは知っている中国語と英語（文海小学の３年生の子どもたちはとてもよく英語を知っている），そしてたくさんのジェスチャーでうまくチームをまとめてくれていた。中国ではあまり知られていない，なわとびを「足」に巻いて遊ぶ内容になると，日本の子どもたちが中国の子どもたちのために，縄を足に巻いてあげるなど，口だけではなく実際に助けてあげる場面も数多く見られた。

授業が終わると，日本の子どもたちはグループ内の中国の子どもたちと握手をして別れていた。また９人しかいない日本の子どもたちが２列になり，その間を中国の子どもたちにハイタッチをしながら通ってもらってさよならをしたいと言い出してくれた。実際に行うと，中国の子どもたちも相当うれしい表情を浮かべ，次には中国の子ど

もたちが同様にして列を作り，ハイタッチで日本の子どもたちを体育館出入り口まで，見送ってくれた。私の授業プランにない，本当にうれしくなるハプニングであった。

４．成果と課題

(1) 成果

杭州日本人学校の子どもたちは総合学習等で，学校近くの店（パン屋，散髪屋等）の方々との関わりは持ってきた。しかし同世代の中国の子どもたちとの交流は極めて少ない。家の近所でも中国の子どもとの交流はほとんど無いに等しい。そんな中，せっかくここ杭州にいるのだから，浅くてもとにかく少しでも中国の子どもたちと関わりを持ってほしいと願っていた。

今回の授業では，こちらが予想するよりもはるかに多くの交流を，子ども同士が自分から関わりを持つということからできていた。いつもの「授業」という場の設定がよかったと思われる。体育大会や学習発表会という「イベント」で関わるのとはひと味違う，普段の子どもたちの姿で交流させることが，より多くの関わりを持たせるためには大事であることを痛感した。。

またたとえ指導者が中国語や英語ができなくても，

- 身振り手振りを駆使
- 日本の子どもたちをモデルとする
- 子どもたちにあらかじめ「中国の子どもたちにやり方などを説明してもらう」ことを伝えておく
- 子どもたち同士で話し合い，教え合いをする場面を設定する

などをしておけば，「お客さん」ではない「お互いがともに主」となる交流を十分に行うことができることがわかった。

日本の子どもたちに授業後，感想文を書いてもらった。9 人が 9 人とも「またやりたい」と今回の交流授業を肯定的に受け止めてくれていた。「次は国語の授業がいいな」，「杭州日本人学校に来てもらって一緒に授業を受けようよ」と提案してくれたり，さらに進んで「次は中国人の先生の授業を日本人学校でやってもらおう」とさらに中国との深い関わりを求める意見を書いてくれる子どももいた。

文海小学の先生方に後日，今回の授業に対しての，中国の子どもたちの感想を教えてもらった。すると日本の子どもたちと同様に「次はいつやるのか。早くやろう」，「中国ではあまり知られていないなわとびの仕方，遊びを教えてもらって楽しかった」，「日本の子どもたちに中国の遊びなどを教えてあげたい」ととてもよい印象を持ってくれている子どもがほとんどであった。子ども同士が実際に関わることがいかに大切か，その場を日本人学校が設定することの重要性をつくづく感じさせる授業であった。

(2) 課題

継続して行うことの難しさがあげられる。例えば学期に 1 回や，月に 1 回などのペースで関わることができれば，子どもたちの交流への意欲も相当高まるはずである。しかしながらここは外国の地である。学校のある下沙地区で言えば，一番近い現地校とは行っても，歩いて行って，授業をするには距離がある。スクールバスもなく，公共交通機関も十分になく，タクシーの数も足りず，車をチャーターするにも一苦労する土地柄である。日本と同じ感覚でいるとうまくいかない。

さらに言葉ができなくても，まずはやってみようという担任の確保である。日本人学校は 3 年前後で教員が変わっていくことが多い。すでに何年も交流授業を行っており，プログラムができあがっている学校とは違い，杭州日本人学校では，今回の授業が開校以来，初めての実験的授業として行われた。毎日の生活では，中国の子どもたちと

ほとんど関わりを持たない杭州日本人学校の子どもたちになんとか関わりを持たせ，国際交流，国際理解を進めるためには，少なくとも毎年必ず１回以上，同様の取り組みを学校として進めていくべきであろう。

５．おわりに

少なからず日本の人たちは文化の違い，また関わりの少なさから，中国の方々への偏見を持ってしまいがちである。そこから不要なトラブルが起きたり，嫌な思いをすることもある。しかし現地の方々と数多く関わることで，そうしたことを回避することもできる。

今回の授業が杭州日本人学校の子どもたちにとって貴重な経験となり，新たな関わりへのステップになる，新たな中国理解へとつながる，そのようなきっかけにもなってほしい。また開校して間もない杭州日本人学校としても，こうした授業交流を１年で終わらせるのではなく，子どもたちのために毎年継続していく体制作り，カリキュラム作りが求められている。

日本にとって中国は，もうすでに無くてはならない存在である。日本での毎日の暮らしでは，ありとあらゆるところで中国と関わっている。その中国と日本の今後を担っていく子どもたちには，こうした授業を受けた経験が大いに役に立つであろうし，またもっともっと多くの日中の子どもたちに，こうした関わりを持つことが必要とされてきている。

私にとっては「中国の現地小学校で授業をすることができた」という，大きな自信を持つことができた。大阪に戻ってからはこの経験を糧として，日中のみならず，日本と世界をつなぐ子どもたちの育成に心を注いだ授業等を行っていくことが，私の責務だと考えている。